

「AMDA」世界中の人を支援

岡山には、世界の各地で自然災害や戦争に苦しんでいる人々を支援する民間の医療ボランティア団体があります。名前はAMDA(アマダ)といいます。東日本大震災でも現地に駆けつけ、被災した人たちの手助けをしています。どんな活動をしているのか調べてみました。(藤原慎也)



ふるさとの物知りになれますよ

どんな組織なの

岡山市内で内科医院を開業していた菅波茂さん(64)が1984年、「世界で支援を求めている人の助けになりたい」という思いから始めました。最初はアジア医師連絡協議会(Association of Medical Doctors of Asia)という名前で、インドの無医村をまわって診療に当たっていましたが、1991年の湾岸戦争をきっかけに戦争で生まれた難民や、自然災害の被災者への緊急支援に力を入れるようになりました。2001年からは現在の名称であるアマダを名乗っています。

岡山本部(岡山市北区)をはじめ、世界中に30支部があり、約400人の医師と看護師がアマダのメンバーとして登録しています。アマダは国際医療NGO(非政府組織)と呼ばれています。世界のどこかで災害などが起きて支援の必要が生じた場合、本部からメンバーに出勤依頼があり、医師らは現地向いて医療活動にあたります。医師らはボランティアです。

学ぶ・教わる・知る



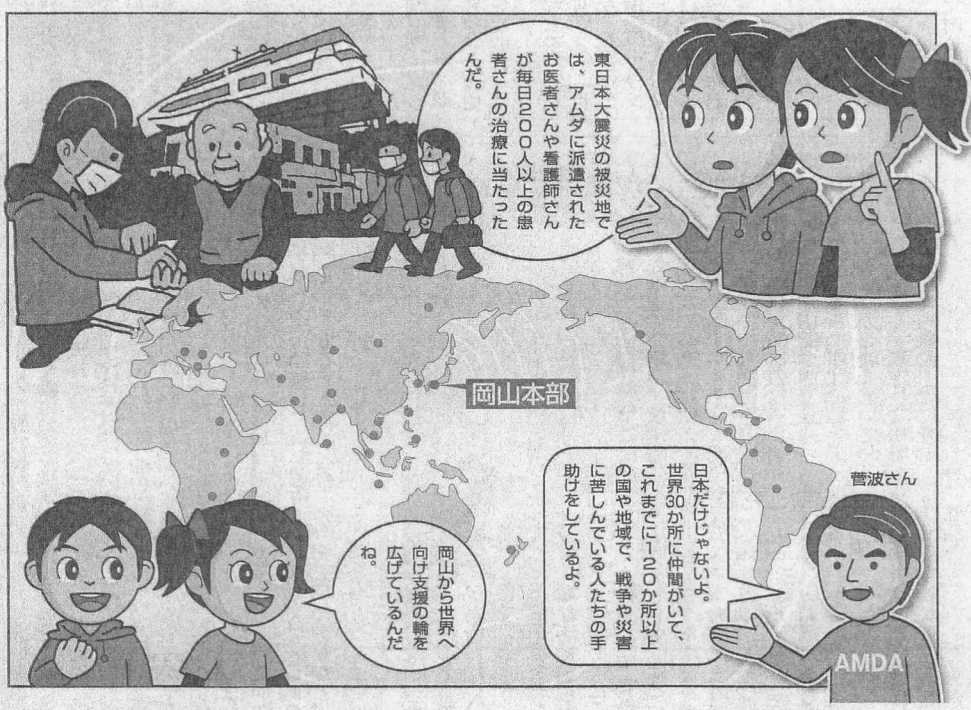
職業訓練や識字教育などの自立支援、災害などで足を失った人への義足の提供などを行っています。

昨年1月のハイチ大地震(死者31万人)では、国民に人気のサッカーで子どもたちを励まそうと、8月、新庄村の中学に通う姉妹2人を含む大阪府、広島県の中高生計16人がハイチの隣国ドミニカ共和国に行き、親善試合を行いました。子どもたちが国ごとに分かれて対戦した後、混成チームをつくり、付き添いの大人たちのチームと試合をしました。同行した菅波さんは「身ぶり手ぶりで意思を伝えながら、笑顔でプレーする姿が心に残りました。この交流は10年間は続けたい」と話していました。

医療支援以外には何をしているの



サッカーを通じて交流する日本、ハイチ、ドミニカの子どもたち=アマダ提供



東日本大震災ではどんな活動をしたの

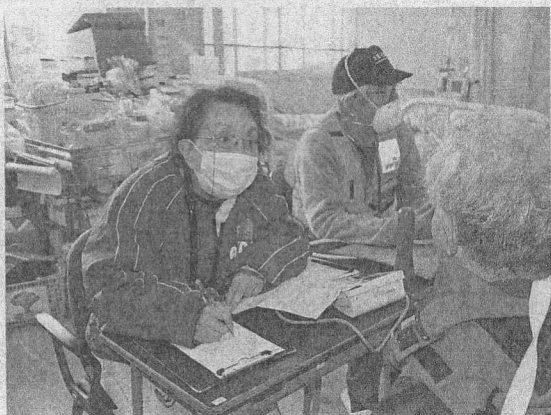


記者は3月下旬に訪ねた岩手県大槌町の避難所で、メンバーの活動を取材しました。

医師たちは被災者と寝食をともにしながら、24時間態勢で救護にあたっていました。東京から駆け付けた内科医の高岡邦子さん(68)は、体のなるさと頭痛を訴える11歳の男児に「ちょっと疲れたねでもお薬を飲んでひと晩寝たら大丈夫よ」と優しく語りかけ「周りのちよっととした物音に敏感になって眠れない」という高齢女性の話をじっくり聞いていました。高岡さんは話を聞いてあげることで気持ちが悪くなるなら、それも治療です」と話していました。

外科医の高橋徳さん(48)は勤務先のアメリカウイスクンシンからやって来ました。高橋さんは、岡山・総社市から貸し出された電気自動車を使い、避難所まで来られない人のところをまわって診療していました。

アマダは大震災翌日の3月12日から医師や看護師を派遣。これまでに約1500人が岩手の大槌町や釜石市、宮城県南三陸町の避難所を拠点に活動しています。医療関係の仕事を目指す高校生に奨学金を支給する計画もあります。



避難所となっている学校で被災者の話を聞く高岡さん(左、3月27日、岩手県大槌町の大槌高校で)